数　学

国　語

（R）

令和８年度入学試験問題

受験上の注意

1. 監督の指示により、解答用紙に受験番号（算用数字）、氏名、フリガナを記入し、受験番号および該当する試験日をマークしてください。記入については解答用紙の注意事項に従ってください。
2. 問題冊子と解答用紙の解答番号を間違えないように注意してください。
3. 各科目のページは、次のとおりです。試験開始の合図があったら、まず受験する科目のページ数を確認してください。

科　目	ページ
数　　学	2～5
国　　語	8～23

4. 試験時間中は、受験票を机上の受験番号の下に呈示しておいてください。
5. 質問、その他用件があるときは、手を挙げて合図してください。
6. 試験時間中の退室は認めません。
7. 試験時間は数学と国語で80分です。
8. この問題冊子は持ち帰ってください。

開始の合図があるまで開かないでください

国語

一　［本文Ⅰ］［本文Ⅱ］は、人間とＡＩの異同について、自律性の観点から述べたものである。これらを読み、後の問に答えなさい。

［本文Ⅰ］

広義の自律性とは、他者の指令をまったく受けずに行動することを可能とする、下等な生物でももっているような原理的な特性である。また、狭義の自律性とは社会的な自律性であり、人間という道徳的主体と同等、あるいはそれ以上に的確な判断をくだし、社会的な責任をとれる主体のもつ特性とする。前者を「理論的自律性[1]（theoretical autonomy）」、後者を「実践的自律性（practical autonomy）」とよぶ。

いうまでもないが、理論的自律性は実践的自律性の前提であり、常識的には、後者が単に「自律性」とよばれることが多い。

さて、問われるべきは、はたしてＡＩ機能をもつロボットが実践的自律性をもつのか、という点だ。あるいは、現在は難しくても、将来、実践的自律性をもつようになる可能性はあるのだろうか。

道徳的主体である人間は、外部の社会環境からの制約（ルールなど）のもとでも、単に盲従するのでなく、自らの自由意思にしたがって行動することができる。制約にしたがうにせよ、逆らうにせよ、ともかく大前提にあるのは当該人物が「自由意思（free will）」をもっていることだ。そして、自由意思のもとで行為を選択できるという点にほかならない。

この点は倫理的見地から非常に大切である。自由平等主義においては、個人が基本的事項（職業選択、信教、表現、住所など）について、自由意思にしたがって選択できることが、倫理的な必要条件と見なされる。自由至上主義においては、これに加えて、私有財産の処分権をはじめ自由意思にもとづく選択の幅をできるだけ拡大することが倫理的に正しいとされるのである。

理論的自律性がなければ自由意思などもてるはずはない。ゆえに理論的自律性は自由意思の前提、いいかえると必要条件である。そして自由意思をもつからこそ、人間は道徳的主体として判断をくだし、その結果に「責任（responsibility）」をとらなくてはな

らない。

ゲリラ戦の戦場で、爆弾らしき小包をもって走り寄ってくる子供を射撃するべきか否か――そんな難しい判断を迫られる兵士もいる。兵士のとった行動は賞賛されるかもしれないし、逆に軍法会議にかけられるかもしれないが、兵士が責任を問われる理由は、基本的に兵士が自由意思をもつからなのだ。そして、責任をとれるからこそ、実践的自律性をもつ存在であると位置づけられるのである。

だがいったい「自由意思」の有無をいかにして確認できるのだろうか。

(注)カント的な倫理観によれば、人間とはそもそも、理性をもつ存在であり、ゆえに自由意思にもとづいて合理的に判断し行為を選択できる、ということになる。だが、少なくともそんなことはＡＩロボットには期待できない。ではいかにして、ある存在が自由意思をもつことを確認すればよいのか。

自分がいつも自由意思や実践的自律性にもとづいて行為をおこなっていると信じている人間は少ないだろう。習慣にしたがってほとんど無意識に行動することも多いし、いやいやルールにしたがう場合も無いではない。人間の内面はかならずしも外面に明快に表れないので、他者には分からないのである。

だが、この「分からなさ」が議論のポイントなのだ。

ロボットの設計者には、ロボットにどういう入力をあたえればどういう出力が現れるか、つまりロボットがいかに行動するか、基本的には分かっている。たとえ細部で不明確なところがあるにせよ、まったく予想外の出力が出現することは原則として無い。もしそうなれば、ロボットは壊れており、廃品ということになる。

一方、相手がロボットでなく人間の場合は、まったく予想外の行為をすることも稀(まれ)ではない。むろん、過去の事例や［A］からある程度は予測できることもあるが、環境条件が流動的な場合、行為の予測がほぼ不可能であることはむしろ普通である。

この不可知性（絶対的な予測困難性）は、人間にかぎらず、相手が生物の場合には原理的に成立する。では不可知性はなぜ生じたのか?――生物が自分で自分をつくるオートポイエティック（自己-創出的）な存在だからである。

生物は、意識するかしないかは別として、自分が所与の環境条件のもとでいかなる行為を実行するかの内部ルールをもっている。内部ルールそのものを自分でつくりあげるのだ。自分の細胞は自分の細胞からつくられるが、その細胞群からなる物理的実体が内部ルールの構造に対応するのである。

（西垣通・河島茂生『AI倫理』問題作成上、一部を改変した）

［本文Ⅱ］

個人の自律にしても、AIの自律にしても、外部の介入を受けずに自ら意思決定ないし判断を行うことができるという性質を程度の差はあれ何らかの形で反映しているように思われる。個人は、自らの生の目的が何であるか、いかに生きるべきかという当人にとっての究極的な決定を行う権限および能力を有しているということができる。一方、AIの自律について語られる場合には、一般にそのような含意は伴っていないものの、AIは、設計者など人間の与えた目的ないし規範を前提にして、その実現の手段について一定の範囲で自ら決定する能力を有している、あるいは有するようになると期待されているということができよう。

しかしながら、個人の自律とAIの自律との間には、やはり依拠している自律概念に大きな相違があると言わざるをえない。そもそも、個人の自律をはじめとする法学における自律概念は基本的に規範的なものである。一方、AIの自律は概して純粋に記述的・［B］的な概念として用いられている。したがって、両者は次元を異にする概念であり、単純に比較したり、同一視することはできない。

将来的にAIが個人と同様に規範的な意味で自律的な人格として承認されるというSF的な想定を度外視するのであれば、AIの自律は、道具である機械が有する純粋に事実上の能力（独立して判断・動作を行う〈能力としての自律〉）として、人間など外部の存在による制御からの相対的な独立性という意味で理解されており、政治共同体において自由かつ平等な存在として尊重されるという〈地位としての自律〉として把握される余地はない。一方、AIの自律が意味するところの独立して判断・動作を行う

〈能力としての自律〉は、経験世界における現実の能力の程度に着目しているという点で、〈目標としての自律〉と重なる側面を認めることができるかもしれない。しかしながら、AIの自律は、あくまでも、人間の与えた究極的な目的ないし規範(2)を前提としており、手段的・道具的なものにとどまる。したがって、それ自体が目的であり、自ら目標を定めることのできる「自己の生の作者」が享受すべき能力について問う〈目標としての自律〉とはやはり異質のものであると言わざるを得ない(3)。

（成原慧「個人の自律とAIの自律」問題作成上、一部を改変した）

（注）カント　一八世紀ドイツの哲学者

問一　［本文Ⅰ］の傍線部分(1)「理論的自律性」を、［本文Ⅱ］にある語句を用いて説明したものとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 1 。

① 社会規範を前提として、人格的な存在として承認されるという意味での自律
② 外部の存在による制御から独立して判断・動作を行うという意味での自律
③ 究極的な目的を決定するための能力を持ち合わせているという意味での自律
④ 政治共同体において、誰もが自由・平等に扱われるという意味での自律
⑤ 自ら目的や規範を定めて行動を選択することができるという意味での自律

問二　［本文Ⅱ］における「個人の自律」「ＡＩの自律」に該当する用語の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は［ 2 ］。

① 個人の自律…能力としての自律・地位としての自律　ＡＩの自律…目標としての自律
② 個人の自律…能力としての自律・目標としての自律　ＡＩの自律…地位としての自律
③ 個人の自律…地位としての自律・目標としての自律　ＡＩの自律…能力としての自律
④ 個人の自律…地位としての自律　ＡＩの自律…能力としての自律・目標としての自律
⑤ 個人の自律…目標としての自律　ＡＩの自律…能力としての自律・地位としての自律

問三　［本文Ⅱ］の傍線部分(2)「規範」に相当する、［本文Ⅰ］にある語句はどれか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は［ 3 ］。

① 倫理的な必要条件
② 責任を問われる理由
③ 外部の社会環境からの制約
④ 自由意思にもとづく選択の幅
⑤ いかなる行為を実行するかの内部ルール

問四　［本文Ⅰ］の空欄Aと［本文Ⅱ］の空欄Bには同じ語句が入る。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は［4］。

① 倫理
② 本能
③ 感性
④ 規律
⑤ 経験

問五　［本文Ⅱ］の傍線部分(3)「やはり異質のものであると言わざるを得ない」の理由として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は［5］。

① 人間の能力が実践的なものである一方でＡＩの能力は観念的なものに過ぎず、ＡＩと人間では能力の具象の程度が異なるから
② ＡＩは人間が定めた目標のかぎりにおいてそれを実現する手段を判断する能力しか持ち得ず、ＡＩと人間では能力の領域が異なるから
③ 自ら目標を定めることのできる能力は人間が訓練をした結果として獲得するものであり、ＡＩと人間では能力を得るための過程が異なるから
④ 人間はＡＩを手段として活用することで各自が意図する目標を達成することを目指しており、ＡＩと人間では能力を得るための目的が異なるから
⑤ ＡＩが有する程度の判断能力では政治共同体から自由かつ平等な存在としての承認を得ることがかなわず、ＡＩと人間では社会的評価が異なるから

問六　［本文Ⅰ］に述べられている論理的な展開を表したものとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。ここで矢印は、上の語句が下の語句の前提となっていることを示す。解答番号は［6］。

① 自由意思 → 責任 → 実践的自律性 → 予測困難性 → 理論的自律性
② 実践的自律性 → 責任 → 自由意思 → 予測困難性 → 理論的自律性
③ 理論的自律性 → 自由意思 → 責任 → 実践的自律性 → 予測困難性
④ 予測困難性 → 理論的自律性 → 自由意思 → 責任 → 実践的自律性
⑤ 責任 → 理論的自律性 → 予測困難性 → 自由意思 → 実践的自律性

問七　［本文Ⅰ］では、ＡＩ機能をもつロボットが実践的自律性をもつようになる可能性について、どのように考えているか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は［7］。

① 実践的自律性の前提である自由意思は、生物特有の予測困難性がなければ成立しないため、生物ではないＡＩロボットが実践的自律性をもつようになる可能性はない
② ＡＩロボットにとっての不可知性は細部の不明確さが原因であり、それは自己創出を阻害する要素となるため、ＡＩロボットが実践的自律性をもつようになる可能性はない
③ 責任をとることができるからこそ実践的自律性が成立するが、トラブル時の責任は人間以外でも追及されるため、ＡＩロボットが実践的自律性をもつようになる可能性はある
④ 理論的自律性は実践的自律性の前提であるが、ＡＩロボットは理論的自律性を持ち合わせているため、ＡＩロボットが実践的自律性をもつようになる可能性はある
⑤ 合理的な判断は過去に基づく予測によってなされるため、予測技術の程度によって、ＡＩロボットが実践的自律性をもつようになるか否かも判断される

この頁は白紙です

二　［本文Ⅰ］［本文Ⅱ］を読み、後の問に答えなさい。

［本文Ⅰ］

パーソナリティの核となっている部分を自我という。ふつうは自我がまずあり、自我と自我が相互作用すると考えるが、社会学ではまず他者との相互作用があり、そのなかから自我が形成されると考える。

自我の大きな特徴は、自己意識という独特の意識のありかた、見る自分と見られる自分という分極化した構造にある。

（中略）

自我が相互作用のなかで形成されるということは、言いかえれば自我は社会化の産物だということである。社会規範を内部に取りこみ、それを核にして自我ができあがるというわけだ。大ざっぱに言えば、C・クーリー、G・H・ミード、S・フロイト、いずれも自我論の構成はそうなっている。大筋でそれはあたっていよう。だがそれでは、社会規範は社会におおよそ共通なものだから、自我はみなそのロボットになってしまう。そんな反論が出てくるにちがいない。R・ダーレンドルフは、社会学は「社会化」に重きをおくあまり、人間が百パーセント社会化された存在であるかのように描いてしまっているとして、それをホモ・ソシオロジクスとよんだ。

もちろん、そうではない。ミードが主我(注1)の概念で、またフロイトがエス(注2)の概念でしめしたように、人間には社会化しきれない部分がある。

その点で、E・ゴッフマンの役割距離(1)も興味深い概念である。人間は、役割を遂行する（社会的）自我のほかに、心のどこかに「ほんとうの自己」を担保し、何かことがあれば、それを持ち出してくるようになっている。この社会的自我と「ほんとうの自己」との距離が役割距離である。対自欲求の充足が人間の基本的な欲求なので、社会的自我がうまく作動して他者に賞賛されたりすれば距離は縮まって同一化し、「これ（＝社会的自我）がほんとうの自分だ」と思い、うまくゆかずに他者から怒られたり、また自分を大きく見せたいときには、距離がグンと遠ざかって「ほんとの自分はこんなんじゃない。これ（＝社会的自我）は世をし

のぶ仮りの姿さ」なんていうことになる。

つまり人間は、対自欲求の満足度を高め、精神衛生を維持するため、役割距離を操作しているわけだ。

（森下伸也『社会学がわかる事典』問題作成上、一部を改変した）

［本文Ⅱ］

「ほんとうの自分」に出会うためのハウ・ツー本に群がる人たちがいる。その気持ちは僕もよくわかる。

だが、この手の本を中毒症状のように読みあさる人たちがいるということは、そんなハウ・ツーを仕込んだところで「ほんとうの自分」などというものにはなかなか手が届かないことの証明となってはいないか。そもそも(2)「ほんとうの自分」という言い方には、どこかいかがわしさが漂っている。

今の自分の生活に満足できない、なんか充実感がない、もっと生きているといった実感がほしい。そうした思いは多くの人が抱えているものだ。そう思うのなら、まずは動いてみることだ、などとよく言われる。もちろん、そこで充実に向けて一歩踏み出すことができればよいのだが、人間というのはどうも惰性に流される。生活を変えるというのは、非常に大きなエネルギーを要することなのだ。

だいいち、どう変えたら自分の日々の生活に張りが出てくるのかわからない。それに、試しに何かをしてみたからといって、いきなり充実し始めるなどということは、めったにない。生活の充実というものは、そんな手軽に手に入れられるものではない。充実にたどり着くまでには、地道な努力の積み重ねを必要とするのがふつうだ。そこに根気が必要とされる。だが、自分にあったものかどうかわからないのに、地道な努力を積み重ねていく気力はなかなか湧かない。

どうもパッとしない。このままでは自分の人生という感じがしない。そうかといって、どう動いたらよいのかわからない。そんな混乱と不安の中にある人にとって、「どこかにほんとうの自分があるはず」「いつかほんとうの自分にきっと出会えるはず」と思うことは、ある種の救いとなる。

今はとりあえず納得のいかない日々を送ってはいるものの、これはほんとうの自分のあり方ではない、自分はこんなものではない、いつかもっと自分らしい生活に出会えるはず。今の自分にふと物足りなさや疑問を感じるときに、そのように考えることで、現実逃避的な安らぎが得られる。「ま、とりあえず今は、これでいいか」と安易な姿勢に安住し続けるときの口実に使える。(3)

惰性に流される自分、意欲の乏しい自分、意志の弱い自分、取り立てて誇れる能力のない自分、情けない自分、思い通りにならない自分、持てあまし気味の自分。こういったものは、どれもほんとうの自分ではないのだ。そう思い込むことで、気持ちが軽くなる。何かが変わるわけではないけれど、束の間の安らぎが得られる。

このように、どこかに「ほんとうの自分」があるはずといった自分さがしの物語は、充実した生活を組み立てるのが難しい多くの人たちにとって、ひとつの救済装置として機能しているわけだ。けれども、こういった自分さがしの物語に安住しているかぎり、自分らしい生活や充実した日々を手に入れることはできない。やはり、今ここで動き出さないかぎり、何も変わっていかない。

このままただ流れに身を任せているだけで、いつか突然「ほんとうの自分」にめぐり会える。そんな妖しげな魅力を放つ物語から抜け出して、今ここで自分づくりのための動きを起こすことが大切なのだ。

いつか「ほんとうの自分」にめぐり会えるはず。だから、今のところは何か物足りないけど、まあいいか。そんな感じでごまかしていては、自分の中に何ら建設的な変化を期待することはできない。けれども、現実逃避的な安らぎが得られるということはある。その意味では、ある種の救いになっているわけだ。

しかし、このところそうした幻想がもちにくくなっているということがないだろうか。「ほんとうの自分」が「どこかにあるはず」といった希望的観測よりも、「自分がどこにもない」「自分がどうにも見つからない」と絶望的な思いにとらわれ、悲壮感や焦りを生じるような時代の空気が強まっているような気がする。

今生きている自分よりもっとすばらしい「ほんとうの自分」が「どこかにあるはず」、「いつかめぐり会えるはず」のように希望がもてれば、現実にさえない生活を送っており、情けない自分に直面せざるを得なくても、何とか凌いでいくこともできるだろう。

だが、そうした希望がもてないとき、今現に生きている空虚な生活、そうした日常に埋もれているさえない自分がすべてということになる。いつかそこから抜け出して自分が輝き出すときがきっとくる。そういった希望的観測が成り立たない。

そんな心理状況の中、自分の中の衝動が露出しやすくなる。キレるというのも、そうした閉塞感によるところが大きいのではないか。自分が空虚だとか、空白だとか、空っぽだとかいったセリフも目立つが、こうした感覚も、どこかにもっと充実した「ほんとうの自分」があって、いつかこの虚(むな)しい生活から抜け出すことができるといった希望がもてれば、適当にやり過ごすこともできるだろう。しかし、そのような希望がもてないとき、自暴自棄な行動につながりやすい。

〔榎本博明『〈ほんとうの自分〉の作り方』問題作成上、一部を改変した〕

（注1）　主我　自己の自由で創造的な側面のこと

（注2）　エス　人間の心の最も原始的で本能的な部分

問一　［本文Ⅰ］で社会学が考える自我の形成過程の説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 8 。

① 人間が社会化しきれない部分である主我やエスが、自我の核となって形成される

② 自我は、まず個人の中に独立して存在し、その後、他者との相互作用を通じて変容していく

③ 「ほんとうの自己」がまず存在し、それが社会との相互作用を通じて「社会的自我」へと変化していく

④ 他者との相互作用がまず存在し、その中で社会規範が内面化され、それを核として自我が形成される

⑤ 個人の内部に見る自分と見られる自分という分極化した構造を持つことで社会規範が内部に取りこまれ、自我が形成される

問二　［本文Ⅰ］でホモ・ソシオロジクスという概念をもとにR・ダーレンドルフが批判している点として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 9 。

① 社会学が、個人の役割距離の操作を考慮に入れていない点
② 社会学が、「ほんとうの自己」という概念を重視しすぎている点
③ 社会学が、人間は社会規範を全く内面化しない存在であると捉えている点
④ 社会学が、自我が個人の内部にのみ存在する独立したものであると見なしている点
⑤ 社会学が、人間を社会規範によって完全に制御されるロボットのような存在として描いている点

問三　［本文Ⅰ］の傍線部分(1)「役割距離」に関する説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 10 。

① 見る自分と見られる自分という、自己意識の分極化した構造を指す
② 社会的自我が他者に賞賛されたときに生じる、自身への満足感を指す
③ 対自欲求の満足度を高めるための、社会的自我と「ほんとうの自己」との間の隔たりである
④ 他者からの批判を避け、世をしのぶ仮りの姿を演じることによって生じる精神的な隔たりである
⑤ 人間が社会規範をすべて取りこんでしまうことによって生じる、社会と個人の間の隔たりである

問四　［本文Ⅱ］の傍線部分(2)「「ほんとうの自分」という言い方には、どこかいかがわしさが漂っている」と筆者が述べるのはなぜか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 11 。

① 「ほんとうの自分」という概念が、現代社会において科学的に証明されていないため
② 「ほんとうの自分」が、個人の努力では到達できない理想的な存在であると認識しているため
③ 「ほんとうの自分」の探求が、個人の孤独感を深め、社会との繋がりを希薄にすると考えているため
④ 「ほんとうの自分」を探求することが、かえって自己を固定化し、成長を阻害すると考えているため
⑤ 「ほんとうの自分」という概念が、現実からの逃避や自己変革の先延ばしを促す危険性があると考えているため

問五　［本文Ⅱ］の傍線部分(3)「納得のいかない日々」とあるが、そこから抜け出すにはどうすればよいか。本文に合致するものとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 12 。

① ハウ・ツー本に従って「ほんとうの自分」を探しに行く
② ハウ・ツー本の内容を疑って、それとは逆の行動をとるようにする
③ 惰性に流される自分を許し、流れに身を任せることで安らぎを得る
④ 「ほんとうの自分」による救済を得るために自分づくりへの動きを起こす
⑤ 生活の充実に向けた地道な努力を積み重ねることで建設的な変化を自らの力で生み出す

問六　［本文Ⅰ］の「役割距離」と［本文Ⅱ］の「ほんとうの自分」とに関する記述には、どのような共通点があるか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 13 。

① 努力なしに自己が変革されることはないという主張を根拠としている点
② 人間が精神的なバランスを保つために、自己認識を調整していると述べている点
③ 他者からの評価によって自己が形成されるという社会学的な視点に基づいている点
④ 人間が社会的な役割を完璧に演じることができず、そのギャップに苦悩している点
⑤ 現在の社会に不満を感じる際に、理想的な自己を想像する心理について触れている点

問七　［本文Ⅰ］の「ほんとうの自己」と［本文Ⅱ］の「ほんとうの自分」との違いを説明しているものについて、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 14 。

① 「ほんとうの自己」は、現実の自己を肯定的に捉えるための概念であり、「ほんとうの自分」は、現実の自己から目を逸(そ)らすための幻想である
② 「ほんとうの自己」は、自己意識の分極構造を説明する上で不可欠な概念であり、「ほんとうの自分」は、不安定な時代を生き抜くための希望である
③ 「ほんとうの自己」は、自己の内面に深く存在する本質的な自己であり、「ほんとうの自分」は、社会的な役割を果たす中で見失われる理想の自己である
④ 「ほんとうの自己」は、社会的自我の欠点を補うために作り出される自己であり、「ほんとうの自分」は、充実した生活を送るために見つけるべき自己である
⑤ 「ほんとうの自己」は、社会的自我との「役割距離」を操作するための存在であり、「ほんとうの自分」は、現状への不満に対する現実逃避のための「救済装置」である

問八　［本文Ⅱ］の最終段落で筆者が述べる、「ほんとうの自分」が見つからないことで生じる問題は、［本文Ⅰ］で述べられていることのうち、どのようなことで解消することができるか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 15 。

① 社会規範の内面化
② 自我の構造の分極化
③ 「ほんとうの自分」の社会化
④ ホモ・ソシオロジクスへの反論
⑤ 役割距離の操作による精神衛生の維持